

令和 2 年 4 月 24 日現在

機関番号：17401  
 研究種目：基盤研究(B) (一般)  
 研究期間：2017～2019  
 課題番号：17H02416  
 研究課題名(和文) 3～7世紀の琉球列島における人と文化の交流史研究

研究課題名(英文) Archaeological studies on the Ryukyu; Archipelago in the 3th to 7th centuries from the viewpoint of human and cultural exchange surrounding Hirota site, Tane Island

## 研究代表者

木下 尚子(kinoshita, naoko)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・教授

研究者番号：70169910

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、広田遺跡が弥生終末期から古墳初頭並行期に種子島在住の人々の墓地として始まり、古墳前期には特色ある貝製装身具をもつ非在地系の人々が加わって、相互に異なる系譜の人々の共同の墓地となったことを明らかにした。このことは人骨のSr同位体比分析によって、由来の異なる複数のグループが抽出された結果と整合する。出土した153体の人骨について悉皆的な調査と記録を行い、骨上の外傷等の痕跡から広田人と在地の人々の間に緊張関係のあったことを指摘した。さらに貝製品の模造実験によってその彫刻用工具が鉄器と石器である可能性の高いことを突き止め、土器胎土の中性子放射化分析により、広田人の南島への移動痕跡を追究した。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

種子島南種子町の広田遺跡ミュージアムにおいて共同研究内容を紹介するパネル展示を行い、研究の進展状況を伝える記事を南種子町の広報誌に掲載した。2019年度に科研費研究の成果を取り入れた博物館講座を開催し、本共同研究メンバーが協力した。具体的には、以下のとおり。8月3日：たねがしま古代塾「化学分析でわかった広田遺跡の謎—土器の分析」(篠藤マリア、具志堅清大、石堂和博)、9月8日：Jr.学芸員講座「骨からわかる最新の研究！」(足立達朗、高棕浩史)、12月8日：たねがしま古代塾「広田遺跡の謎を紐解く」(山野ケン陽次郎)

研究成果の概要(英文)：Hirota site is a burial site on the island of Tanegashima. In our research we could show that the site had been in use from the end of the Yayoi period, while a new group of people with characteristic curved shell ornaments joined this group in the early Kofun period, such that there were two different groups of people buried together on this site. This is consistent with Sr isotope analysis of human bones that showed traits of different origins. Overall investigation of bones from 153 individuals showed traces of injuries on the bones which hint to tensions between the people buried in Hirota and autochthones. Furthermore, experiments on the production of shell ornaments show a high probability that iron tools as well as stone tools were used. Travel routes of people from Hirota to the south were investigated with Neutron Activation Analysis of pottery.

研究分野：考古学

キーワード：広田遺跡 大隅諸島系土器 中性子放射化分析 形質人類学 Sr同位体比分析 貝符製作実験 技術移動

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

広田遺跡は1957年から2006年までに実施された5回の発掘調査によって168体の人骨と、4万5千余点の貝製装身具が得られ、その埋葬習俗を含めて種子島および周辺地域の歴史に豊富な資料を提供している。これまでに指摘されている広田遺跡の特徴は以下のようによまとめることができる。

1. 人骨に関するもの：低身長、過短頭、低顔による均一的な形質の特徴をもつ集団である。高い施工率を示す抜歯風習をもち、抜歯型式が左右非対照である、人工的な頭蓋変形の習俗をもつなど、身体加工にかかわる独特の風習をもつ。
2. 埋葬習俗に関するもの：一次葬が主体の下層の埋葬から、二次葬が主体の上層に変化する。骨を焼く習俗が存在する。墓では、同時期の種子島の在地墓（覆石墓）とは異なるスタイルの墓が主体をなす。
3. 土器編年に関するもの：弥生時代終末期から古墳時代後期末に至る種子島の在地土器が副葬・供献されている。
4. 貝製品にかんするもの：貝符、竜佩型貝製垂飾など他に例をみない形状の装身具が存在する。夥しい数の貝珠を消費し、これらが上半身を覆うような着習俗をもつ。貝符や腕輪の表面に精緻な彫刻が施される。
5. 地域間交流に関するもの：南九州との交流があった（南九州の型式の土器、ガラス小玉、管玉の存在による）。奄美・沖縄の貝殻を大量に消費した（サンゴ礁域の巻貝類を使った貝製品による）。

広田人とその文化は、身体加工、埋葬習俗、装身習俗において、種子島の在地的な側面をもつ一方で、これとは不連続なきわめて独自性の強い面をもつことが特徴である。またこれらの習俗は連続的に変化しながら350年前後継続している。種子島の一地に数世代にわたって居住した広田人とはどのような集団で、特色ある文化をどのようにして形成したのか、が当面の研究課題である。

### 2. 研究の目的

広田遺跡のこれまでの発掘調査で得られた遺物について、「人の形質、技術、移動」をキーワードに、形質人類学、彫刻技術の復元のための文化財科学的・実験考古学的試み、遺物・遺構の考古学的分析によって、広田人の実像の解明を目指す。

### 3. 研究の方法

今回の共同研究では、広田人が貝殻を採取するために島内外の沿岸を移動した足跡、隣接する集団との交流、南下した琉球列島に残した文物に注目して、広田人の移動ルートを、土器と埋葬習俗から追った。土器班、総括班がこれを分担した。

広田人の物質文化と技術については、これを代表する精緻な彫刻をもつ貝符を取り上げ、その彫刻技術、工具について実験を交えて追究した。貝符班がこれを分担した。

以上に加えて、広田人の人骨そのものについて今日的な問題意識による再検討と、その生育環境を反映する分析を行った。人類班がこれを分担した。広報班は、これらの成果を、広田遺跡ミュージアムを通して公開した。以下研究班ごとの方法を具体的に示す。

土器班：土器班では広田遺跡出土の全ての土器を再検討し、弥生時代終末期から古墳時代後期における種子島の編年を整理して大隅諸島系土器の時期的空間的位置付けを確認し、その上で型式学的方法と胎土分析による二つの方法で、種子島産土器の移動の有無を調べた。型式学的方法では、広田人との関わりが考えられる種子島北部、沖縄諸島伊江島、久米

島において出土土器の悉皆的な再調査を実施する。胎土分析では、広田遺跡の土器、沖縄諸島の大隅諸島系土器、在地土器について中性子放射化分析（Neutron Activation Analysis：略称 NAA）を実施した。NAA は種子島において最初の事例であるため、今後の分析に備えるデータベース作成の意味も兼ねている。分析はウィーン工科大学で実施した。

貝符班：貝符班では、下層人骨に伴って出土した貝符の彫刻技術の詳細を、肉眼観察とデジタルマイクロスコープによって記録して、彫刻の特徴を把握し、これに対応する工具を推測した。これと併行して、大型イモガイによる貝符の復元的製作を実施し、石材による貝殻の擦切によって板状の貝符素材を得、文様彫刻では、刃先を鉄によるものと複数種類の石材（種子島産硬質砂岩、屋久島産石英、メノウ、サヌカイト）によるものとで彫刻し、これらの痕跡と貝符の痕跡を比較した。

人類班：人類班では、人骨の悉皆調査検討による形質人類学的調査と、人骨のストロンチウム（以下 Sr）同位体比分析を実施する二つの方法をとった。分析や観察においては、隣接する同時期の遺跡である鳥ノ峯遺跡や椎ノ木遺跡の人骨標本も適宜分析対象とし、さらに在地（種子島）の  $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$  値を得るために、広田遺跡で出土した動物骨（シカ、イノシシ、サル）の分析も合わせて実施した。分析は九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに設置されている量分析装置を使用した。

広報班：広報班では、共同研究メンバーと協力して本共同研究の内容および進行状況を地元住民にむけて発信した。

総括班：奄美・沖縄地域を対象に埋葬遺跡を集成し、これまでの研究成果ならびに今回の土器班と人類班の研究成果をふまえて広田人の南下の足跡を復元した。

#### 4. 研究成果

土器班の成果：型式学的研究

石堂和博氏による土器の型式学的な整理の結果、大隅諸島系土器の編年を以下のように整理した。

鳥ノ峯式古段階（弥生時代後期後半）

鳥ノ峯式新段階（弥生時代終末期～古墳時代前期前半）

広田式（古墳時代前期後半～後期前半）

上能野式古段階（古墳時代後期後半～6世紀末）

上能野式中・新段階（6世紀末～8世紀）

広田遺跡

具志堅清大氏は、奄美・沖縄地域の広田遺跡並行期の土器を、伊江島と久米島の遺跡を対象に集中的に調査し、これと併行して既報告内の類似例を集成し比較検討した。その結果、奄美・沖縄における大隅諸島系土器の影響は「かなり低い」とする結論を導いた。その一方で、上記に併行する奄美群島の兼久式土器に、広田遺跡上層貝符に共通する文様がしばしば認められることを指摘した。

土器班の成果：胎土分析

NAA は、日本ではまだ実施例の少ない胎土分析の方法である。今回、保管機関の協力を得て、広田遺跡の土器 36 点、鳥ノ峯遺跡の土器 6 点、具志原貝塚の土器 4 点の、合計 46 点を分析し、以下の成果を得た。

- ・ 広田遺跡の土器において、固有の特徴をもつ 4 グループを検出した。北側墓群では 1 グループ、南側墓群では 3 グループが検出され、両者にまたがるものはなかった。
- ・ 鳥ノ峯遺跡の土器において、同様の 1 グループを検出した。
- ・ 具志原貝塚の土器は、これらのグループと対応しなかった。

広田遺跡の北側墓群と南側墓群は、時期と埋葬様式を異にする関係であるため、双方の胎土グループが排他的な関係とみられる点は示唆的である。

#### 貝符班の成果

山野ケン陽次郎氏は、彫刻痕跡の分析から、貝符を彫刻した工具に 3 種類の刃先形状 - 刃先が丸みを帯びる丸刀、刃先が方形の平刀、刃先接地面が細い三角刀のあることを指摘した。これをふまえて、琉球列島で出土している広田下層式貝符 19 点について彫刻痕跡を個別に検討し、下層期・新段階には技術的な地域色が奄美・沖縄地域で生まれていることを明らかにした。

比嘉保信氏は、広田遺跡下層の C 地区 5 号人骨に伴った貝符 (T171、T172、T173) を模倣した製作実験を行い、貝符の彫刻工具の刃先には、鉄ならびに石材の使用が可能であることを指摘した。広田人は鉄器と石器の両方を適宜使い分けて貝符を作成していたと考えられる。

#### 人類班の成果：形質人類学的研究

高棕浩史氏、米元史織氏は、九州大学が保管する広田遺跡出土の人骨すべてについて、具体的な残存状況を含めた個別別情報を提示し、従来の指摘に新たな知見を加えた。これによると、広田人は長さ(奥行き)の短い頭をもち、身長の高い華奢な体形の集団で、食生活はあまり豊かではなかったが、激しい労働は少なく、船をこぐ動作の多い生活を送る人々であったとみられる。人工的な頭の変形や、故意に歯を抜く独特の風習をもつことが特徴で、その容貌はかなり特徴的であったと推測される。注意したいのは、頭に深い傷をおった人物や、全身を著しく損傷する人物の存在である。その多くが治癒しているところを見ると、外傷の原因は内的な対立というより外的なもので、集団間の緊張激化も予想される。広田遺跡の北 16.5km にあり、広田遺跡と密接な関係をもつ鳥ノ峯遺跡では、骨に刺さったままの磨製石鏃を伴う埋葬事例が確認されている。鳥ノ峯人に磨製石鏃の副葬習俗が盛んであることを考慮すれば、集落間の緊張関係は日常的だった可能性がある。

#### 人類班の成果：Sr 同位体比分析

人骨 28 体、動物骨 7 個を対象に、歯の中で 4 歳以下に形成されたとみられる箇所を選んで Sr 同位体比分析を実施し、これらについて波形分析を行った結果、Sr 同位体比の値 0.70883 から 0.710171 までの間に以下の 4 つのクラスターが析出された(図参照)。これらは、在地の値(動物骨の値)を基準に、以下のように色で区分された。

黄：在地の値よりも低い重みづけ平均値を示す個体

青：在地の範囲に平均値が収まる個体

緑：在地の値よりも平均値は高いが一部重複している個体

赤：在地の値よりも平均値が高く誤差もそこから外れる個体

米元氏等は、この区分に考古学による装身具ならびに時期区分名を加えてグラフに表示し、以下を指摘した。

- ・ 墓地形成の初期に属する北区 1 号人骨は在地の幅に収まる。
- ・ 広田遺跡下層の古段階でも新段階でも同じ時期に 3 つ程度のグループが存在している。
- ・ 下層期・新段階で、青に属する個体なくなり、新たに赤に属する個体群が出現する。この個体は現段階では鳥ノ峯遺跡・椎ノ木遺跡出土人骨には見られない。
- ・ 鳥ノ峯 3 次 C、B、6 号墓 b は広田遺跡周辺にその出自をもつ個体群の可能性が考えられるが、最終的には鳥ノ峯遺跡周辺から出土した動物の歯牙の検討などを待って結論を出す必要がある。

- ・ 広田遺跡周辺で生まれ育った人が椎ノ木遺跡に埋葬された可能性がある。
- ・ 広田遺跡周辺において、下層期では抜歯形式が出自表示となっていた可能性がある。
- ・ 広田遺跡下層の新段階において、赤色に属する個体群が新たに出現する点は重要である。

下層期を通じて安定的に存在するのは黄色、 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$  値が低い個体群であるという点も重要である。

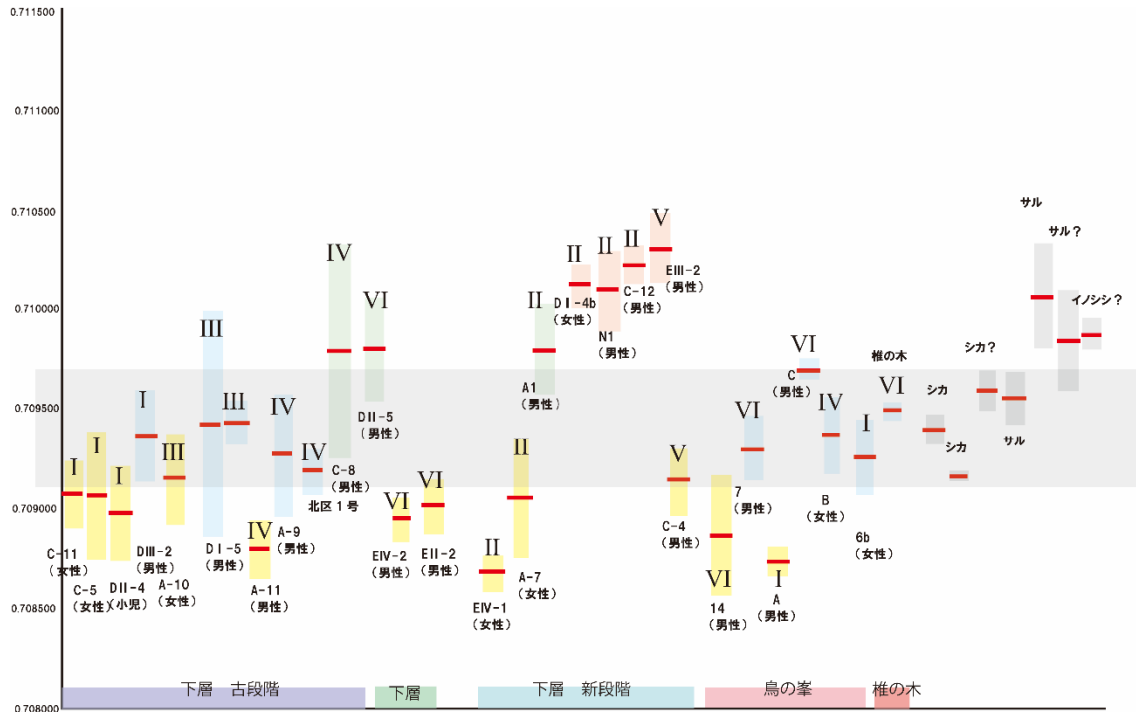


図5 ストロンチウム同位体比と木下（2003）の段階区分との関係

赤線：Sr 値の重み付け平均値の中央値

ボックス：誤差（ $2\sigma$ ）の幅

### 総括班

木下は、広田遺跡開始期の埋葬習俗と装身習俗について分析し、広田遺跡の始まりと広田人の移動について以下をのべた。

広田遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代初頭並行期に、オオツタノ八腕輪をはめヤコウガイ匙を副葬する在地墓制（覆石墓）を継承する人々（腕輪グループ）が、砂丘北側に埋葬されることで始まった墓地である。古墳前期～中期初頭並行期になると、腕輪グループの人々に加えて、貝符、竜佩、大量の貝製玉類の装身習俗をもつ人々（貝符グループ）が、配石墓等固有の埋葬習俗を伴って加わり、砂丘南側に墓地をつくり始めた。ここから、広田遺跡の南側墓群に、相互に異なる習俗をもつ2グループの人々の共同の墓地が形成されるようになる。

貝符グループに特徴的な装身習俗（彫刻をもつ貝符・竜佩の使用、頭飾り、耳飾り、玉類の大量消費）と埋葬習俗（側臥葬、配石墓等、二次葬）は、それ以前の種子島の習俗との連続性を欠いている。これらの登場については、金関丈夫氏以来の「外からの文化移入」に要因を求める考えがある一方で、近年では、近隣地域との交流を背景に種子島で生み出されたとみる考えが、複数の研究者から提示されている。述べてきた在地文化との不整合を踏まえると、前者の可能性もなお検討していく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木下尚子	4. 巻 7
2. 論文標題 オオツタノハ腕輪の再登場 - 弥生時代終末期の新しい祭祀 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 先史学・考古学論究	6. 最初と最後の頁 85.101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naoko Kinoshita	4. 巻 1
2. 論文標題 The Seafaring of Prehistoric Ryukyans from the Viewpoint of Environment and Culture	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Springer Nature's Linguistics, Anthropology & Archaeology book program for Asia Pacific	6. 最初と最後の頁 315.332
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 木下尚子	4. 巻 36
2. 論文標題 貝輪粗加工品の流通 - 弥生時代貝交易再論 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 南島考古	6. 最初と最後の頁 143,160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子	4. 巻 -
2. 論文標題 南島先史文化と縄文・弥生文化 - 沖縄の貝塚文化を中心に -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴博国際シンポジウム 再考！縄文と弥生	6. 最初と最後の頁 14.26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子	4. 巻 19
2. 論文標題 金海大成洞91号墳出土のゴホウラ・イモガイ製品 - 貝装馬具とその位置付け -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『金海大成洞古墳群』博物館学術叢書	6. 最初と最後の頁 175.202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子	4. 巻 1
2. 論文標題 「燕の子安貝」考 - 古代のタカラガイ使用について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文科学論叢	6. 最初と最後の頁 1.18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子	4. 巻 149
2. 論文標題 ゴホウラ腕輪から鍬形石へ - 装身具から威信財・装具への変遷 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 97.104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子・坂本稔・瀧上舞	4. 巻 219
2. 論文標題 鹿児島県宝島大池遺跡B地点出土貝塚前期人骨等の年代学的調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 231.239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子・坂本稔・瀧上舞	4. 巻 219
2. 論文標題 沖縄県伊江島貝志原貝塚出土貝塚後期の貝殻集積の年代学的調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 273,277
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子・坂本稔・瀧上舞	4. 巻 219
2. 論文標題 沖縄県伊是名村貝志川島遺跡群出土貝塚前期人骨の年代学的調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 265,275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子・坂本稔・瀧上舞	4. 巻 219
2. 論文標題 沖縄県読谷村所在遺跡出土貝塚後期の貝殻集積と人骨等の年代学的調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 277,294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子・坂本稔・瀧上舞	4. 巻 219
2. 論文標題 沖縄県うるま市所在遺跡出土貝塚時代の人骨と貝殻集積の年代学的調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 301,312
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 木下尚子・坂本稔・瀧上舞	4. 巻 219
2. 論文標題 沖縄県北谷町所在遺跡出土貝塚後期の貝殻集積の年代学的調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 313,320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子・坂本稔・瀧上舞	4. 巻 219
2. 論文標題 沖縄県浦添市所在遺跡出土貝塚後期の貝殻集積の年代学的調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 333,338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠藤マリア、ヨハネス・シュテルバ	4. 巻 1
2. 論文標題 中性子放射化分析による胎土分析の方法と意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 5,11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ヨハネス・シュテルバ、篠藤マリア、石堂和博、具志堅清大	4. 巻 1
2. 論文標題 広田遺跡・鳥ノ峯遺跡・具志原貝塚出土土器の中性子放射化分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 12,22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石堂和博	4. 巻 1
2. 論文標題 広田遺跡出土土器の新資料	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 23,29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石堂和博、具志堅清大	4. 巻 1
2. 論文標題 大隅諸島系土器の分布とその意味	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 30,47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山野ケン陽次郎	4. 巻 1
2. 論文標題 広田遺跡出土貝製品の新資料－九州大学総合研究博物館資料の報告－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 49,63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高椋浩史、米元詩織	4. 巻 1
2. 論文標題 広田遺跡出土の人骨	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 65,208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石堂和博	4. 巻 1
2. 論文標題 大隅諸島系土器の編年と位置づけー供伴関係を中心にー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 209,221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 具志堅清大	4. 巻 1
2. 論文標題 奄美・沖縄地域における種子島の文化的影響ー3~7世紀土器を中心にー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 223,240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山野ケン陽次郎、比嘉保信	4. 巻 1
2. 論文標題 広田下層式具符の彫刻技術に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 241,262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米元詩織、高椋浩史、足立達朗、岩永省三、中野伸彦、小山内康人	4. 巻 1
2. 論文標題 広田遺跡出土人骨の再検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 263,279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下尚子	4. 巻 1
2. 論文標題 埋葬と装身習俗からみた広田遺跡—下層期の3～5世紀を中心に—	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広田遺跡の研究	6. 最初と最後の頁 281,327
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 木下尚子
2. 発表標題 五千年前六千年前時期琉球列島の史前文化
3. 学会等名 大un坑文化與週邊區域關係探討學術研討會（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高椋浩史
2. 発表標題 鹿児島県広田遺跡出土人骨の形態分析による身体的特徴検討
3. 学会等名 第71回日本人類学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木下尚子
2. 発表標題 縄文文化と沖縄の貝塚文化
3. 学会等名 沖縄考古学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木下尚子
2. 発表標題 腕輪と玉からみた安徳台-2号甕棺人の謎解き-
3. 学会等名 国史跡指定記念特別講演会(福岡県那珂川市)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 篠藤マリア・具志堅清大・石堂和博
2. 発表標題 化学分析で分かった広田遺跡の謎-土器の分析
3. 学会等名 広田遺跡ミュージアム「たねがしま古代塾」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 足立達朗・高棕浩史
2. 発表標題 骨からわかる最新の研究! 広田遺跡の研究成果
3. 学会等名 広田遺跡ミュージアム「たねがしま古代塾」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山野ケン陽次郎
2. 発表標題 広田遺跡の謎を紐解く
3. 学会等名 広田遺跡ミュージアム「たねがしま古代塾」(招待講演)
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 木下尚子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 216
3. 書名 再考！縄文と弥生 - 日本先史文化の再構築	

1. 著者名 木下尚子ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 297
3. 書名 ビーズでたどるホモ・サピエンス史	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	足立 達朗  (adachi tatsuro)  (00582652)	九州大学・比較社会文化研究院・助教   (17102)	
研究分担者	山野 ケン陽次郎  (yamano ken yojiro)  (10711997)	熊本大学・埋蔵文化財調査センター・助教   (17401)	
研究分担者	高椋 浩史  (takamuku hisohumi)  (10759418)	九州大学・アジア埋蔵文化財研究センター・学術研究者   (17102)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	米元 史織  (yonemoto shiori)  (40757605)	九州大学・総合研究博物館・助教    (17102)	
研究 協力者	岩永 省三  (iwanaga syozo)		
研究 協力者	篠藤 マリア  (shinoto maria)		
研究 協力者	シュテルバ ヨハネス  (sterba johannes)		
研究 協力者	石堂 和博  (ishido takahiro)		
研究 協力者	小脇 有希乃  (kowaki yukino)		
研究 協力者	具志堅 清大  (gushiken seita)		
研究 協力者	比嘉 保信  (higa yasunori)		